

NATO 最強戦車隊がウクライナへ出発、しかし戦場でそれはどう働くか？

RT

January 25, 2023

NATO 部隊からウクライナへの戦車の補給が、今週のトップニュースとなっている。キエフは、ロシアの侵攻が始まって以来、その西側のスポンサーに、これらの兵器をずっと要求してきた。そして今、戦争後 11 か月めに入って、こうした要求が満たされそうな様子である。

アメリカは、その 31 台の「エイブラムズ」主力戦車隊を送ると宣言した。ジョー・バイデン大統領は、水曜日、その急いで用意したスピーチで、この戦車は起動させ維持するには複雑なので、アメリカはキエフに、「これらを戦場で効果的に動かすのに必要な、パーツと装置」を供給すると言った。

また同じ日に確かめられた内容として、ドイツ政府は、自国のストックから「レオパルド 2 A6」戦車を送り、ポーランドのような他の国から、ウクライナへ、ドイツ製の機械を移送させると言った。1 月 14 日には、ロンドンがその「チャレンジャー 2」をキエフへ輸送する計画を通知し、また現在、パリが「AMX-56 ルクレール」戦車を供給することは、避けられないようだ。

ロシアの専門家やジャーナリストは、集まって熱心に、これら西側の主たる戦車と、ロシアの T-90 の違いを論じている。彼らは、そのそれぞれの装甲能力、銃砲、正確さ、能動的・受動的防御システム、弾薬、その他多くの属性を比較した。

しかし結局のところ、これらの討論は、現実的な価値を持たない。その戦場こそが、あらゆる兵器や軍事的装備の、利点や欠点の、唯一のリトマス試験紙なのである。戦闘での使用の確かな統計だけが、もしそれが信じられるものなら、現代の主要戦車の比較分析に要求される、すべてである。

もう一つ心得ておくべきことは、すべてに戦車が、現在の対戦車システムに対し、欠陥をもつということである。そこで問題は、NATO の戦車の何台が、ウクライナに到達するかである。

キエフは何台の戦車を必要としているか？

計算を簡単にするために、我々は装甲車の分隊 (division) を用いることにする。すなわち、かつてのソ連共和国の装甲車軍の主たる構造的・戦術的ユニットを、我々の尺度として用いるとしよう。ソビエトの手引書によれば、装甲車の分隊は、296 の戦車、230 の歩兵と戦う車両、54 の自動銃器システム、2 千以上の通常車両、それに 1 万 2000 近い兵士と将校でなければならない。

キエフは何個の分隊を必要とするか？ ルガンスク、ドネツク、それにザポリージャの、3 つの主たる前線の、少なくとも、それぞれ 1 パーセントである。(ロシアの) 特殊軍事作戦のゾーンの接触ラインは、現在のところ、815 キロメートルに及んでいるから、3 つの分隊では、あまりにも弱小で問題にならない。しかし今のところ、これは無視することにしてしよう。

3 つの装甲車分隊を合わせれば、全部で約 900 の戦車になる。それとは別に、もう 1 つの装甲車分隊が、ベラルーシの前線で必要になるかもしれない、そこでは非常に激しい戦闘が予想される。その場所でエスカレーとすれば、1 つに装甲車分隊、すなわち同じユニットの予備が絶対必要となる。そうなれば、必要な戦車の数は、300 から 1,200 に増えるだろう。

最後に、司令官という存在は、彼自身の予備なしには済まされない。いわゆる最高司令官の予備である。少なくとも装甲車分隊が一つなければ、この予備は実は予備ではない。それは、必要とされる総計 1,500 の戦車に、さらに 300 の戦車加わることを意味する。

考えるべきもう 1 つは、戦闘作戦中のウクライナに、損失が生ずることである。この場合の装甲車ユニットの 1 日の損失平均は、10 から 15% に上る。無能化された戦車が約 15 から 20% になると、それは残りの修復を待つ間、典型的に回復不能の損失状態となる。

簡単に言うと、戦闘作戦中の損失を取り返すためには、少なくとも更に 300 の戦車が要求される。これは計算すると 1,800 の戦車になり、それは絶対的に最小限度の数字と考えねばならない。

これら非常に大まかで、馬鹿げた計算と言ってもいい。にもかかわらず、それらは我々に与えるのは、大まかな数字である。

キエフは何台の戦車を手に入れるだろうか？

これまでのところ、NATO 諸国は、ウクライナに供与する戦車を、数ダースだとしている。これは仮説的な最小限度の、更に一部でしかない。

英国とポーランドは、それぞれの装甲車団を、14 台からなると公的に約束している。ドイツも同じ数量を供与するだろう。一方アメリカは、31 台の「エイブラムズ」重量兵器を用意すると言っている。

ドイツのラムスタイン航空基地で行われた、アメリカ主導の防衛コンタクト団の、最近の集会で、12 か国の高官たちが、もしベルリンが OK を出すならば、約 100 台の戦車をキエフに送ると論じていた。ABC 報告によれば、その通りになったようである。

Rheinmetall 社は、これに追加して、総計 139 の戦車をウクライナに送るかもしれない——88 の「レオパルド 1」と、51 の「レオパルド 2A4」を含めて。しかしドイツの製造業者たちは、その 29 台だけが、2023 年夏の前に輸送が可能になるだろう、と認めている。

NATO の戦車は、どんな影響を与えるだろうか？

これらの戦車は、いつか近いうちに戦うだろうか？ 「M1 エイブラムズ」の例を考えてみよう。これはアメリカの軍事力のシンボルの 1 つと考えられる。

訓練の不十分な乗組員を乗せ、不十分なメンテナンスと供給のインフラによるサポートしかない、戦車のわずかの量では、ネガティブな結果しか出そうにない。それらは戦場でウクライナの運命を変えることはできず、燃えるアメリカの戦車の映像は、アメリカの公的見解を傷つけるであろう。

そういうことで、アメリカの主要な兵器、その防衛産業の誇りであり喜びであるものは、この戦場で、長い期間にわたって屈辱を味わうだろう。これはペンタゴンが、どんな状況においても、決して起こしてはいけない何かである。

したがって、何か現実的な戦闘が起こる前に、撤退チーム、戦車修理部隊、それとスペア・パーツの供給が、整っていなければならない。一方、乗組員たちは、アメリカの戦車を扱う、もっとよい訓練を受けなければならない。

最後に、しかし最小ではなく、ウクライナにおける米主力戦車の最初の展開は、有意味なウクライナ軍の成功と、少なくとも戦術のレベルで、つながっていなければならない。それは少なくとも 200 から 300 の（おそらく 400 から 500 の）戦車を必要とするだろう。

そうしなければ、「M1 エイブラムズ」のウクライナへの供給は、軍事的にも政治的にも無意味である。一集団（10 から 15 の戦車）ずつそれらを移送することは、これらの装置に何の意味もなく、誰かの注目さえ引くことなく、戦場で燃えることを意味するだろう。

これまでのところ、知られたデータによれば、ロシアは、敵の装備に関する重要なトラブルに巻き込まれたことはない。これはロシアの防衛省も、ほとんどの西側アナリストも、ともに合意しているらしい事柄である。

軍事作戦が始まって以来、ロシア防衛省報道官 Igor Konashenkov によれば、ロシア軍は、376 の飛行機、203 のヘリコプター、2,944 の無人航空機、402 の対航空ミサイル・システム、988 の MLRV、3,898 の野外砲と迫撃砲を破壊した。

それに 7,614 の戦車、および他の装甲車が含まれる。

自己満足の余地はない

大いにあり得ると思われることは、最初の NATO の戦車隊が、ウクライナ乗組員の訓練に用いられることで、一方、ポーランドは最初に、ドイツとアメリカの戦車の便宜のための、メンテナンスと修復を与えるであろう。

しかし、このトレーニングが長時間、継続することはない。十分なトレーニング計画でも、数週で可能だろう。一方、「T-64/84」の乗組員を教育して、「M1 エイブラムズ」や「レオパルド 2A5」と戦わせることは、ものの数日で完了する。

西側が、戦車のウクライナへの供給を考えているという報告で、問題なのは、戦車そのものではなく、タブーを破ることである。最近までは、西側の製造した装甲車をウクライナに移送することは、禁止されていた。

このタブーがひとたび破られると、遅かれ早かれ、キエフが欲しがっていた 1,800 の西側主力戦車を、彼らが手に入れるだけでなく、それ以上のことが起こるであろう。

その時点で、いやそれよりも早く、ウクライナは、たとえばザポリージャ前線に、攻撃力を創り出すことができるであろう。もしそのような戦力が、ロシアの防衛力を破ることに

成功するならば、それは3日のうちに、メリトポリまでの82キロをカバーするであろう。これはこの地域での、ロシア防衛の深さを完全に切断するであろう。

このことを念頭に、ロシア軍は、西側の補給が彼らの十分なポテンシャルに達するずっと前に、手ごたえのある軍事的・政治的結果を、得ていなければならない。

[訳者 Greatchain 注]

この軍事専門家による、現在のロシア-ウクライナ情勢の解説は、我々をひとまず安堵させるが、日本政府やメディアの方々を、歯ぎしりさせるかもしれない。しかし、世界で最優秀(?)の戦車のかなりの量を皮算用して、ロシアの敗北を期待しても、我々の想像するようなわけにはいかないということを、この論文は教えてくれる。

それを別にしても、同じような趣旨のRT論文は他にもある――

「英国トップのシンクタンクが、ロシアのサイバー戦争の、ウクライナに対する優位を明らかにした――なぜ西側メディアは、その報告を無視していたのか？」

(概要) ――11月30日、エリートの軍事シンクタンクで、UK政府と深い絆をもつロビー集団である「王立連合サービス研究所」(RUSI)が、「**ロシアのウクライナ侵略からの通常戦争行為についての予備的教訓：2022年、2月-7月**」というタイトルの、記念碑的な報告を発表した。(ロシアの)特殊作戦を、失敗として描こうと必死であるにもかかわらず、普通にロシア嫌いのRUSI研究所でさえ、モスクワの、キエフに対するサイバー戦争の全面的な優位を、無視することはできていない。

また、最近、ウクライナのゼレンスキー大統領への批判が、各方面で噴き出してきた。やはり現ウクライナ政府は、岸田さんや主流メディアが考えたがる、正義の味方ではないのである。ゼレンスキーこそ、欧米と結んで祖国ウクライナを滅そうする元凶なのだ。

先日紹介した、ゼレンスキーに追放された、元ウクライナ与党党首メドヴェチュクの、別のインタビューや、手記「**もう一つ別のウクライナがある**」などが流布している。

「プーチン：ウクライナのネオナチが、人々にテロ行為を行い、2次大戦の教訓を忘れて、民族浄化を行っている」というSputnik記事が、たった今、入ってきた。とにかく、プーチンやロシアをテロリスト呼ばわりするような、馬鹿げた、何の役にも立たないゲームは、やめるべきである。